

生田川 (一幕)

森 鷗外

二重の高さは一尺ぐらいの低いものがよい、柱は角材でなく丸柱とする。立木は丸もので十分な高さを望みたい。垣根は生花を用いた方が効果が上る。窓はフキヌキ、背景幕は空色。

人物

蘆屋処女

高く上げたる髪に白銀しろがねの釵子さいし。黄揚の小櫛。時の花(紅梅)の挿頭かざし。淡紫の臙纈らふけつの表衣うはぎ。紅染めくれなゐぞの裙くん。白地に浪に鴛鴦をしの模様ある薄き裳。錦の裙帯くんたい。紫綵むらさきだんの領巾ひれ。腰機こしばたに懸かりあるとき傍に柿かせひ、櫛たたり、苧笥をけを置く。壁に懸け置く笠は、菅の市女笠、白栲しろたへの於須比おすひを被りて戴く。はひりに置く舄くつは丹舄にくつ。

処女の母

背後に上げたる髪。細かき柞ゆすの櫛。釵子さいし。朽葉色の衣。茜染の裳。山藍摺の裙。倭文布しづおの裙帯。

織物の守袋だんぞめに縦染の紐附けたるを腋わきに懸く。珠数。

火桶は白木しらき。

壁に懸けたる笠は白きからむし 泉たれぎぬの垂衣附けたる市女笠。

はひりに置くくつ 烏あきふたげは秋二毛。

菟会壮士うなひをとこ。

烏帽子。款冬色の衣、白き袴。浅縹うすはなだの藤纈あをの襖。烏皮くりかはの浅沓あさぐつ。葛卷つづらまきの小太刀。葛靴つづらゆきに交知したる鹿天ししやふたならべ二列やつめに八目の鳴鏑かぶらや矢一手うはざしを表指す。白檀しらまゆみの節木の反高そりだかなる弓。

茅渟壮士ちぬをとこ。

烏帽子。紺めぞめの纈めぞめの襖。白き衣。白布袴しろのかりばかま。鹿夏毛しかのなつげの行膝むかはぎ。毛沓こくしつ。黒漆かたなの刀子かたなに織物の燧袋ひうちぶくろ。白銀あづせの目貫めくわの太刀。黒葛靴くろつづらゆきに酖篋きはしの矢やを盛りたるにくりや 矧矢一手くりやを表指す。所所にかばまき 樺纏かばまきしたる梓あづせの弓。

法師。

鈍色にびいろの納衣なふえ。色色さいさいの帛さいでを綴りたる糞掃衣ふんざうえ。阿闍梨笠あせりかさ。麻鞋まかい。左手に鉢はち。右手に白銅きはりの五銚鈴ごしやうれい。

衣（考証 関保之助）

攝津国菟原郡蘆屋の里なる民家。左手犬黄楊の垣の間に門口。そこに沓。一間の正面の中程より右壁。笠二つ懸く。壁の前に機を立つ。中程より左の方窓。火桶。柳筥やうの物。

(蘆屋処女、機を織りゐる。その母、手を火桶に翳してゐる。)

母　もう春が近いと見えて、(窓の方を見る)生田川の水がぬるんだと、髻髪どもが云つてゐた。わたしのやうな年寄でも、どうやら炭櫃が疎ましくなつた。(少し火桶を押し遣る。)

処女　(機の手を停む。)ほんにさうでございませう。此間の雷から時候が變つてまゐりました。どうしたわけか、わたくしはかう頭を押さへられるやうな心持が致してなりませんわ。

母　いやいや。それは時候のせいばかりではあるまいよ。血の道も手伝つてゐるかも知れない。それに年寄つて同じ事ばかり云ふとお思かも知れないが、あの毎日のやうにお出でになる二人の方に、いつも曖昧な事ばかり云つてお置だもんだから、お前の氣の静まる日は無いのだよ。

処女　あ。その事だけは、おつ母さん、どうぞ云はないで置いて下さいね。その事だけは、わたくしは考へても見たくございませぬし、申したくもございませぬの、考へたり、申したり致すと、わたくしは頭痛が致してまゐりますから。

母

それ御覧な。お前の頭の痛いのは、春先のせいばかりでは無いのだよ。お前の言ひたく無いと云ふのを、何もわたしが無理に彼此^{かれこれ}云ふのぢやあ無いが、どうも何時までも此儘にして置かれるものでは無いからね。

(処女眉を蹙めたるが、忽ち又思ひ返したる如く、素直に機を下り、母と向き合ひて坐す。間。)

わたしも初の内は、お前が面白半分に、二人の方を綾^{あや}なしてお出でなのかとも思つたのさ。だが、何事に附けても、軽薄がましい事の嫌なお前の事だから、まさかそんなわけでもあるまいと思つて、よくよく見てみると、お前は飽くまで眞面目だらうぢや無いか。わたしもねえ、かうなつて見ると、どうもお前の気が知れなくなつてしまつたのだよ。それでお前の厭がるのを知つてゐながら、こんな事を云ひ出すのさ。一体お前はどうしようと云ふのだい。

処女

さうでございますね。

母

さうでございますねぢやあ、分からないね。お前だつて何とか思つてお出でだから、頭痛もするのだらうぢや無いか。一体どうしようかと云ふのだい。

処女

それはねえ、おつ母さん、わたくしだつて思つてゐる事があるどころぢやございませんわ。思つてゐる事はございまして、どう致す事も出来ないのですもの。

母 変ぢやあ無いか。二人の内のどちらかにお前が極めなくちやあ、治りつこは無いちや無い
か。

処女 それはどうも極められませんの。

母 おやおや。それでは矢張極めないで置いて、二人であんなにおしのを、見てみたいとお云
のかい。

処女 なんの、わたくしが、それを見てゐたうございませう。わたくしはそれを見てゐるのが、つ
らくてならないのでございますわ。

母 (少し声色を励ます。) どうもそれでは分からないね。この津の国に、服部はとりの女子は沢山ゐ
ても、お前の織つた繪はたの値が一番好いと云はれる程、何に付けても器用なお前が、二人の
男に思はれたからと云つて、まさか意気地が無くて捌さばが附かないと云ふわけでもあるまい
ね。

処女 ええ。おつ母さんがなんと仰おつしやつても、どう思つて仰やるといふことが分かつてゐますか
ら、わたくしは腹を立てたり拗ねたりは致しませんの。おつ母さんの仰やるとほり、わた
くしにはあのお二人を釣つて置くの綾あやなして置くのといふ心持もございませんし、それか
と申して、わたくしだつてあのお二人に彼此云はれるので、只途方に暮れて、ぼんやり致
してゐるのでもございません。わたくしが極められないと申しますのは。

母 ふん。お前が極められないとお云のは。

処女 極められないと申しますのは、それはあの、（徐かに立つ、）人間の力に及ばない事ではございませうかと、思ふからでございませう。

（二人暫く無言。忽ち群鳥むらどりの羽音、窓のあなたに聞ゆ。処女窓の戸を開け向うをぢつと見てゐる。）

母 なんだい。

処女 あの平張ひらばりの打つてあるあたりから、鴨が立つたのでございませう（間。）

母 お前が極められないとお云のは、どなたかにお前が極めたら、残る一人の方かたが、その儘にはをられないと思ふのだらうが、わたしはさうは思はないよ。（処女はじつと外を見てゐる。）さうしたら、一人の方があきらめておしまひなさるだらうと思ふがね。（処女はぢつと外を見てゐる。）お前はさうはならないと思ふのかい。

処女 （こなたへ向く。）それは大変な事になりは致すまいかと思ひませうの。

母 はてね。そんならお前が殺されるとか、お前の極めた方のかたが殺されるとかお思のかい。どうもお二人ともそんな気の荒い方のやうでは無いのだがね。

処女 ええ。そんな気の荒い方方ではございませんとも。

母 それではお前に捨てられた方のかたが死んででもおしまひなさらうと云ふのかい。

処女 (又母と向き合ひて坐す。) それは死んでおしまひなさいますわ。

母 (微笑む。) まあ。矢つ張利発なやうでも世間見ずだね。

処女 いいえ。きつと死んでおしまひなさいますわ。

母 そんなら、お前の大変な事になるだらうとお云のは、その事なのだね。

処女 いいえ。

母 はてね。(暫く考ふ。) その方に死なれては、お前達が済まないとお云のかい。

少女 ええ。それは二人の間に、亡くなつた方の影が立つて入らつしやるのですもの。

母 ふん。お前の考も大抵分かつたよ。わたしの考では、少しお前が思過おもひすぎしをしてお出でのや

うだが、わたしだつてきつとさうで無いとも云はれないのさ。併しそれはお前が出し抜け

にどなたかに極めると云つたなら、捨てられた方のかたが、あきらめにくいかも知れない。

どうだね。お二人の間で極まつてしまふやうにしたら。

処女 そんな事は出来ませんわ。

母 (又微笑む。) 何故。出来ないには限らないぢやないか。(菟会壮士、茅渟壮士袖垣の外に現

る。二人共人柄詞つき処女と母とよりは、稍時代なり。弓を持ち、鴨一羽づつを提ぐ。) ど

なたかお出でなされたやうだね。

処女 お二人ですわ。

菟会 壮士 (一步下がりにて、茅渟壮士に。) さあ。どうぞお先へ。

茅渟 壮士 いえ。あなたこそ。

菟会 わたくしは此土地のもの、あなたは隣国のお客ではござりませんか。どうぞ御遠慮無く。

茅渟 いつも同じやうな事を申すやうでござりますが、さう仰やると、つい愚癡な事を申したくなります。何故わたくしは思ふ人と、同じ津の国には生れずに、和泉の国に生れましたやら。

菟会 これはお詞とも覚えません。道が遠ければ、お志の深さも知れるといふものではござりませんか。

茅渟 志は劣らぬ積でござりますが、思ふ人とまだ片生かたおひの昔から、お識合のあなたこそ、お羨ましくござります。

菟会 いや馴れては目にも止まらぬ習でござります。珍らしく来られたあなたがお羨ましくござります。かう申してゐては、果てしがござりません。とにかくお先へ。

茅渟 そんならお許ゆるし下さりませ。(柴の戸に手を掛く。) 頼みます。

(処女靜かに戸口に歩み出で、戸を開く。三人顔を見合せて思入あり。暫く無言。)

処女 どうぞおはひりなさいまし。

茅渟 御免下さい。

菟会 御免下さい。

(二人の壮士、処女の母に目礼し、各弓を傍に置いて坐す。母の位置と三角形になる。処女は戸口に近き処に突居る。)

母 これはお二人ともお揃で、好うこそお出で下さいました。

茅渟 丁度こなたへまゐらうと存じまして、あの平張ひらばりの打つてあるあたりまでまゐりますると。

菟会 和泉のお客と落ち合ひまして。

茅渟 鴨一羽づつ取りましたのを。

菟会 お土産に持つてまゐりました。

(二人鴨を母の前に出す。)

母　まあ、揃ひも揃つた立派な鳥でございますね。娘。厨へ持つて行つてお置。
処女　はい。

（鴨を取りて右手へ入る。）

茅渟　（菟会に。）こなたの母刀自が、立派なと仰やつたので、あの鵠くぬびの事を思ひ出しました。あれはまだあの儘浮いてをりませうかな。

菟会　きつとあの儘をりませう。何処から飛んでまゐつたものか、今朝見たときからあの通りに
ぢつとしてをりまする。

母　あの、鵠があると仰やいますか。

茅渟　さやうでござります。先程二人で鴨を射ますと、近くにゐた鴨の群は一度にぱつと立ちま
したが、直その向うに鵠が一羽立たずに浮いてをりました。小舟を出して射た鴨を取つて
まゐりました時も、鵠は静かに波を切つて、二丈ふたつゑばかり退いたばかりで、矢つ張立たずに
浮いてゐました。

菟会　雪のやうに眞白な、大きな鵠でござります。

母 それはまあ、珍らしい。(少し間を置き、思案したる様子にて、膝を進む。)かう申すと、な

んとやら差出がましようございますが、あなた方お二人で、その鵠を射て御覧なさいません

か。二筋の矢に鳥は一羽、お中あてなすつたそのお方を娘の婿に致しませう。

茅渟 はつ。これは何よりの仰せおほせでござりまする。菟会のお方。いかがなものでござりませう。

菟会 なる程。御尤な母刀自の仰でござります。わたくしも異存ござりませぬ。

茅渟 かういふ内も心が急く。直にこれから。さあ。

菟会 さあ。

(二人弓を取りて立つ。処女右手より出で、立ちたる儘にて、ぢつとこなたを見る。二人の
壮士、同時に処女の顔を見、さて同時に目を母の方に移す。)

茅渟 後程お目に掛かります。

菟会 後程お目に掛かります。

母 お待ち申してをりまする。

(二人の壮士、柴の戸を出で、左手に入る。)

処女 (二人の左手に入るまで、ぢつと立ちゐて、徐かに母の傍に進み、向ひ合ひて坐す。) 又お出でなさるのですつて。

母 こん度お出でなさるのは、多分どなたかお一人で、そのお方がお婿さんだよ。

処女 何故なの。

母 (微笑む。) 何故だか当てて御覧。

処女 分かりませんわ。

母 (又微笑む。) 好い思附おもひつひがあつたのだよ。(間。) 実はね、さつき二人で持つてお出での、あの鴨を射なすつたとき、大きな白い鵠が一羽、鴨が立つても舟が来ても、逃げずに浮いてゐたのだとき。その話をわたしが聞いて、それを取つて来た方を婿にしようと云つたのさ。

処女 まあ。そんならおつ母さんは、今朝から川に浮いてゐる、あの鵠を取つて来いと、お二人に仰やつたの。

母 さうだよ。今朝から川に浮いてゐるとは、それをお前は知つてお出でか。

処女 ええ。ここから好く見えますわ。大きい白い鵠ですもの。

母 さうかい。

(間。処女心配らしき様子。) 変な顔をお為でないか。又頭痛がして来たのかい。

処女　　いいえ。

母　　ではどうしたといふのだえ。もしかわたしの云つたことがお前の氣に入らないのかい。

処女　　いいえ。

母　　分からないねえ。そんならお前の出来ないと云つたことが不思議に出来て、今日一日に極まるのを、悪いとお思では無いのだね。

処女　　いいえ。それが悪くはございませんの。唯わたくしには久しい間、極まらないでゐた事が、そんなに急に極まるのが、恐ろしいやうでございますの、それにあの大きな鶴を、今朝ふいと見た時から、なんだか氣に掛かつてゐたのに、あれが射られて極まるといふのも、恐ろしいやうでございますの。

母　　なんのつまらない。さういふ内に、その鳥はもう射られたかも知れないのだよ。

処女　　（独語のやうに。）ほんに鶴はどうしたかしら。

（処女徐かに立ちて戸を開け、外そとを見る。間。）

母　　見えるかい。

処女　　（見返らずに。）ええ。（語氣緩く。）緑に光る水の上に、まる団めた綿かなんぞのやうに、眞つ

白に見えてゐますわ。

母 二人の方はどうなすつたのだらうね。(間。)川はつい其所そこだけれど、道が曲がつて附いてゐるから、まだお出でなされぬかも知れない。

処女 あら。

母 なんだい。

処女 白い鳥が大きくなりましたわ。(間。)羽を広げたのでございませうか、(間。)又小さくなりましたわ。(間。)舟が出ますの。(間。)鳥が流れますわ。(間。)鳥の方へ舟がまゐりますわ。(間。)人が二人乗つてゐますわ。(稍長き間。)舟に鳥をいれますわ。(間。)こちらへ漕いでもどりますわ。(稍長き間。)鳥に矢が立つてゐますわ。矢が二本。

母 なんとお云いひだえ。矢が二本鳥に立つてゐるといふのかい。

処女 ええ。(間。)舟が着きましたわ。

(母も処女も暫く無言。処女はちつと窓の外を見てゐる。)二人で鳥を中に置いて、動かずにお出でなさいますの。

母 (心配らしき様子。)まだ何か見えるかい。

処女 ええ。(間。)いつまでも動かずにお出でなさいますの。

(長き間二人無言。処女はぢつと窓より見てゐる。鐘の音。窓の外次第に夕映にて赤くなる。此時僧墨染の衣。受糧器を持ちて登場し、戸の外に立つ。)

僧

煩惱謂貧嗔

癡慢疑惡見

隨煩惱謂忿

恨覆惱嫉慳

母

おや。托鉢の坊様がお出でなすつたね。いつも朝の内なのに、こんなに遅くなって。

処女

(静かに窓を離れて、懸けたる笠を取る。)あの、おつ母さん。わたくしは一寸行つて見て来ますわ。

僧

依止根本識

五識隨縁現

或俱或不俱

如禱波依水

母

ほんとうにその鳥に、矢が二本立つたのなら、お前が行つたつて極まりやあすまいぢや無いか。

処女 (戸口にて沓を穿く。) いいえ。おつ母さん。あの鵠が死にましたので、今日わたくしの身

の上が、どうか極まらなくてはならないやうに思はれますの。(語氣緩かに強く。) 人間の小さい智慧で、どうしようの、かうしようのと、色色に思ひましたのも、夜が明けて見れば、燈火ともしびの小さい明りがあるか無いか知れないやうなものですわ。

僧 現前立少物

謂是唯識性

以有所得故

謂是唯識性

非実住唯識

処女

おつ母さん、門かどに入らつしやる坊様にお上げなすつて下さいよ。

(処女僧に会釋して。戸口にて意を決したる如く早足になり、左手に入る。窓の外薄暗くなる。母柳筥やないばこやうの物より錢を取りて手に持ち出で、僧に贈る。僧受糧器にて受く。)

僧

爾時住唯識

離二取相故

無得不思議 むとくふしぎ
是出世間智 ぜしゅつせけんち

(僧入る。鐘の音。)

母

おう。娘が門で云つたことは、どういふ心で云つたのやら。跡で思へば氣に掛る。わたしも
ちよいと行つて見よう。

(壁に懸けたる今一つの笠を取る。幕。)

底本 脚本シリーズ 第一集

著者 文部省青少年演劇研究会 編

出版者 教育弘報社

出版年月日 一九五五 3 版